

2025

JAL Scholarship Program Report

2025 JAL スカラシッププログラム報告書

テーマ:「SDGs」～持続可能な未来へ～

オンライン:2025年6月25日(水)～7月1日(火)

対面:2025年7月2日(水)～7月16日(水)



JAL FOUNDATION
公益財団法人JAL財団



JAPAN AIRLINES

参加者

韓国、北京、大連、上海、広州、天津、香港、フィリピン、台湾、ハノイ、ホーチミン、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、インド、グアム、オーストラリアから選出された海外学生（海外スカラー生）25名と、日本人学生（学生コーディネーター）7名が参加した。

スケジュール

6月25日	水	オンラインプログラム1日目 午後:オリエンテーション(スケジュールおよび注意事項の説明、JAL 財団の活動紹介) SDGs や環境問題に関する話題提供 ホームグループの顔合わせ、目標設定「一筆入魂」
6月26日	木	オンラインプログラム2日目 午後:講義「気候の危機にどう向き合うか」 江守正多 氏(東京大学未来ビジョン研究センター教授)
6月27日	金	オンラインプログラム3日目 午後:講義「生物多様性の現状と課題」 講師:芝崎瑞穂 氏(一般社団法人 Change Our Next Decade 代表理事)
6月28日	土	オンラインプログラム4日目 午後:講義「ゼロウェイストという暮らしの選択」 講師:服部雄一郎 氏(翻訳家・文筆家)
6月29日	日	休息日
6月30日	月	オンラインプログラム5日目 午後:過年度スカラー生発表・交流、日本航空(JAL)の環境の取り組み紹介
7月1日	火	休息日
7月2日	水	海外スカラー生 来日
7月3日	木	対面プログラム1日目 午前:福岡へ移動 午後:オリエンテーション(JAL 財団挨拶、事務局メンバー紹介、参加の注意事項など)
7月4日	金	対面プログラム2日目 午前:チームビルディング 午後:環境ワークショップ「砂浜」、日本文化体験ワークショップ「水引をつくろう」
7月5日	土	対面プログラム3日目 午前:水の循環を知る「源流ツアー」 午後:講義「SDGs 未来都市『宗像市』の取り組みについて」 宗像大社の参拝体験と世界遺産「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」を学ぶ
7月6日	日	対面プログラム4日目 午前:基調講演「世界遺産の海『宗像 Munakata』で地球の持続可能性を考える」 講師:清野聡子 氏(九州大学大学院 工学研究室 環境社会部門 生態工学研究室准教授) 午後:福岡教育大学の紹介・キャンパスツアー 福岡教育大学生とのワークショップ「お互いの国の環境問題の現状・SDGs 取り組みをシェアして考えよう！」

7月7日	月	対面プログラム 5 日目 午前:さつき松原海岸でのビーチクリーン 午後:大島学園の小学生・中学生とのワークショップ「ウミゴミをつくろう」
7月8日	火	対面プログラム 6 日目 午前:タカミヤ環境ミュージアム(旧:北九州市環境ミュージアム)の視察 午後:株式会社サニックスひびき工場の視察 魚町商店街の視察
7月9日	水	対面プログラム 7 日目 午前:東京へ移動 午後: JAL スカイミュージアムの視察
7月10日	木	対面プログラム 8 日目 終日:株式会社 JR 東日本テクノハート TESSEI 社とジブリ美術館の視察
7月11日	金	対面プログラム 9 日目 午前:日本フードエコロジーセンターの視察 午後:さがみこファームの視察
7月12日	土	対面プログラム 10 日目 終日:樹木・環境ネットワーク協会によるごみ処理施設視察と森林整備活動
7月13日	日	対面プログラム 11 日目 午前:研修のふりかえり 午後:アクションプランの作成(グループ討議・資料作成)
7月14日	月	対面プログラム 12 日目 午前:アクションプランの作成(グループ討議・資料作成) 午後:ワークショップ「わたしの 2030 年目標」
7月15日	火	対面プログラム 13 日目 午前:アクションプラン発表会① 午後:アクションプラン発表会② 「わたしの 2030 年目標」の発表 修了式・フェアウェルパーティー
7月16日	水	帰国

オンラインプログラム

★オリエンテーション

25名の海外スカラ生と、7名の学生コーディネーター(日本人学生)がオンライン上で初めて集った。

はじめに、JAL 財団理事長 赤坂祐二による海外スカラ生・学生コーディネーターに向けた挨拶の後、プログラムの趣旨、スケジュール、注意事項、JAL 財団の取り組みについて、それぞれ説明が行われた。また、この研修を通して「未来に続く豊かさを地球規模で考え自ら行動できる人財『地球人』」として学んでほしいというメッセージが伝えられた。



JALスカラシッププログラム

アジア・オセアニアの大学生、大学院生を日本へ招待
日本人学生との交流、研修や文化体験を行う

1975年に日本航空によって開始
今回のプログラムは、54回目
これまでに参加した海外の学生は、1,707名

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、
2020年、2021年は開催を見合わせ。
2022年はオンラインで開催。そして、2023年
は約4年ぶりに対面プログラムを再開した。

2025年は、さらに魅力あるプログラムを開催。

★SDGs や環境問題に関する話題提供

国連が定める「持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)」と環境問題に関する基礎情報の講義が行われた。SDGs では「誰一人取り残さない(leave no one behind)」「変革(Transformation)」がキーワードであることや、17個のゴールが5つのグループに分けられることが解説された。また、ここに至るまでの経緯や環境問題解決に向けたムーブメント、2030年のゴールが我々に残された最後のチャンスであることなどが紹介された。SDGs 達成の基盤には、海や陸、気候変動といった環境に対する問題の解決が不可欠であることから、本プログラムでは環境問題の解決を見据えた視察やプログラムが中心的に企画されていることが伝えられた。

SDGs (持続可能な開発目標)

国連が定める2030年までの私たちの目標(17個)

大切なキーワード

- 誰一人取り残さない (No one will be left behind)
- 変革 (Transformation)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGsを支える5つのP

Planet 地球

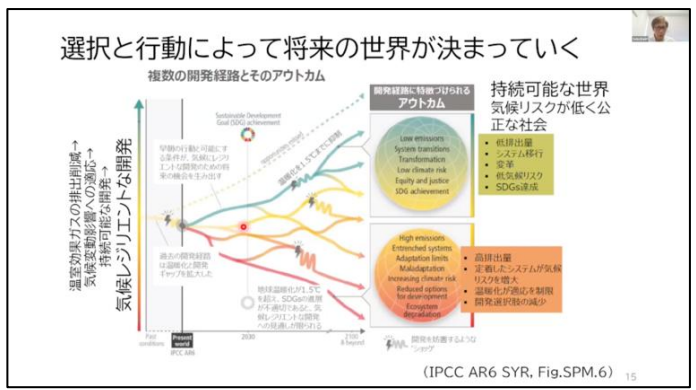
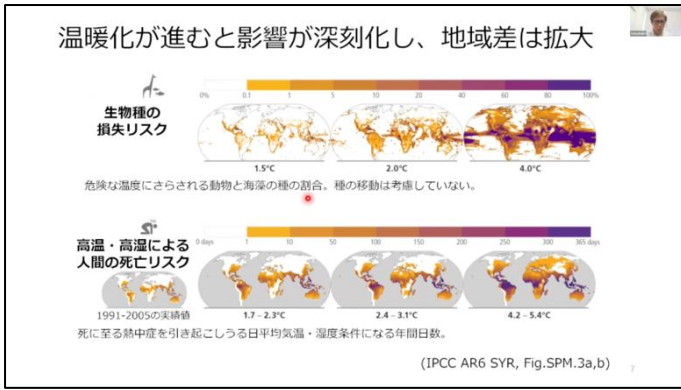
People 人間

Prosperity 豊かさ

Peace 平和

Partnership パートナーシップ

持続可能な開発



★講義「生物多様性の現状と課題」

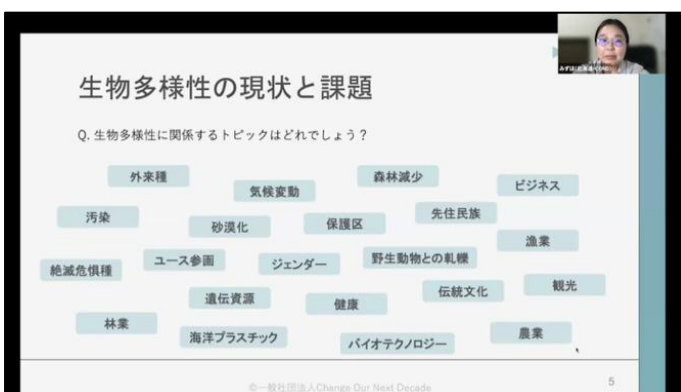
講師: 芝崎瑞穂 氏(一般社団法人 Change Our Next Decade 代表理事)

講義では、生物多様性の現状と課題や、生物多様性を守るための行動、私たちにできることなどについて話された。はじめに、生物多様性と関連がある課題を意識してもらうために、生物多様性の問題に関するトピックを 21 個の単語の中から選ぶクイズが出題された。これらのすべてのキーワードが生物多様性条約の会合で議論がなされているトピックであり、生物多様性にはさまざまな問題が絡み合っていることが示された。

また、生物多様性の課題には、気候変動の 1.5 度目標のような成果がわかりやすい共通の目標がないため、取り組みが難しいことも解説された。また、わたしたちの暮らしとの関わりの例として、生物多様性が損失するとお寿司が食べられなくなる、アウトドアができなくなる、といった楽しみがなくなることや、災害が増える、医薬品の開発ができなくなることなどの問題が挙げられ、生物多様性による身近な恩恵が様々にあることがわかった。また、国際的な動きとして、昆明モントリオール生物多様性枠組やネイチャーポジティブについての解説、今後の生物多様性回復のシナリオについて紹介された。

私たちができることについては、ユース世代が声を上げる意味や、対象者の関心別にアプローチをする行動変容モデルに関する解説があった。最後に、環境問題に取り組んでいくのであれば、楽しくなければ続かないので、好きなことなどから取り組みを始めていくことが良いというメッセージが話された。

講義を聴いた感想として、海外スカラー生・学生コーディネーターからは、若者が生物多様性の保全に参加する際の効果的な方法や、生物多様性とジェンダーとの関わりなどについて質問があった。講師からは、SNS での発信や実際の活動に参加してみるなどが効果的であることが述べられ、ジェンダーとの関わりについてもルールメイキングの男女比率の問題や、水汲みなどの女性が担う仕事といった具体例を挙げて説明がされた。また、講師が生物多様性保全に取り組む際のモチベーションや、海外でデモに参加した際の気持ちについて質問するスカラー生もいた。スカラー生と年齢が近く、実際に活動を実施している講師であったため、スカラー生にとっても刺激があったようだった。



★講義「ゼロウェイストという暮らしの選択」

講師：服部雄一郎 氏(翻訳家・文筆家)

服部氏は、もともとごみについてあまり関心がなかったが、町役場に転職したことがきっかけで、ごみ問題に関心を持ったという経歴のある方だ。講義は「ごみ」を起点に進められ、はじめに、ごみの分別やコンポスト、ゴミを減らす工夫をしているかどうか、などが問いかけられた。

また、日本のごみ問題の現状について解説された。日本では自治体や地域によってルールが異なることがあるものの、15 種もの分別が当たり前で、海外と比較して、かなり細かく分別がされている。一方で、生ごみの堆肥化がされていないことから、日本の家庭ごみの燃えるごみのうち、80%は資源化ができるにも関わらず、現在は焼却されていて、日本がいかに衛生的なごみ処理に力を入れているかが説明された。この点が、リサイクル率の高い韓国との大きな違いの要因になっている。

次に、どうすればごみを減らすことができるのかについても解説があり、ごみを減らす黄金則(6R)、ごみを減らすために「モノを減らす」「ごみになりにくい素材を選ぶ」という秘訣が紹介された。実際に講師が暮らしの中でごみを減らすために実践している 5 つの工夫や、ゼロウェイストに関する書籍についても案内があった。

最後に、個人がごみを減らしても社会のごみは減らないが、大切なのは「価値観の変容」だというメッセージが伝えられた。従来の価値観では、持続可能な未来には程遠く、人々が変わることによって社会全体の行動変容が生まれるのである。

海外スカラー生・学生コーディネーターからは、ごみ処理やリサイクルに関する実践的な質問が多く寄せられた。韓国のスカラー生からは「日本人は分別もしっかりしている印象だが、なぜリサイクル率が低いのか」との質問があり、講師からは「生ごみの焼却が主な原因で、焼却全体の 30%を占めていることが大きな課題」と説明があった。また、プラスチックの焼却割合に関心を示した参加者には、日本のごみ処理の実態や焼却によるエネルギー回収についての解説があった。堆肥化に関する技術的な質問も出され、講師は湿度・温度管理の工夫により、気候を問わず可能であることが紹介された。ベトナムのスカラー生からは、行動につながりにくい社会課題へのアプローチについての質問があり、講師からは「制度の設計」や「子どもを通じた意識変容」「インフルエンサーによる発信」など多様な方法の提案があった。

6R ~ ごみを減らす黄金則

- ① Rethink (考えを改める) 身の回りのごみについて、立ち止まって考える
- ② Refuse (断る／買わない) ex. 不要なストローやすぐに捨ててしまうような景品を断る
- ③ Reduce (減らす) ex. 過剰包装の製品を買わない／買う頻度を減らす
- ④ Reuse (繰り返し使う) ex. 使い捨てストローを使わず、ガラスストローを繰り返し使う
- ⑤ Replace (素材を変える) 紙や植物由来の素材など、より環境負荷の低い素材に変える
- ⑥ Recycle (リサイクル) 缶や瓶や紙類はきちんと分別して資源回収に出す

ほかにも…
Repair (修理する)、Rot (生ごみや草木はコンポスト)、Rental (借りる)、
Repurpose (別の目的に使う)、Remind (気づきを与える) …etc.

わが家のおすすめTOP 5

- #1. 木綿のふきんで食器洗い (洗剤不要!)
- #2. ヘチマたわし
- #3. 服ラップ
- #4. 金属製のカミソリ
- #5. ヒノキ板をお風呂のふたに


★過年度スカラー生発表・交流

昨年に参加した 2024 スカラー生 4 名と、20 年前に参加した 2004 スカラー生 5 名が参加して、プログラムに参加した感想や参加後の人生経験などを発表したり、交流する回が行われた。

2024 スカラー生からは、ごみ問題について SNS で発信を行う「GPAP チーム」と、過去スカラー生の同窓会を開催した「チームワンワン」からそれぞれ 2 名が参加した。各グループは、作成したアクションプランの紹介やスカラシッププログラムの思い出、その経験を今にどう生かしているかなどについて発表をした。

SNSで宣伝の重要性

SNSは、小さな行動を可視化し、共感を広げる力を持っています。個人や団体が発信することで「自分にもできる」と思わせるきっかけとなり、行動変容を促す大きな波となります。環境保護には“見える共感”が不可欠です。



@JALスカラシップ2024
@JALecolart

解決法：ソーシャルメディアの活用 「ゴミ芸人」でゴミ原因を見直そう

「GPAP」

GOMI PROBLEM ACTION PLAN

目的

- ・ゴミ問題への意識の向上
- ・ポイ捨てを減らすこと



- OUR AIM TOWARDS ACTION PLAN - 目的

01 情報を得る機会をつくる

環境問題について情報を共有し、考える機会をつくります。本プログラム終了後も、継続的に「自分事」として考えられる姿を目指します。

02 行動の輪をひろげる

JALスカラシッププログラムのコミュニティを生かして、情報を得る場・行動の輪をひろげていきます。

この思いを形にするために、私たちは2024年12月に第1回同窓会を開催しました。

\ JALスカラー生が繋がり皆で社会課題解決を！ /



- ハイブリット開催し、2019年以降の約60名が参加
- プログラム終了後のそれぞれのストーリーを語る
- 参加年を超えて対話できるラウンドテーブル

また、2004 スカラー生からは、当時のプログラムへの参加の様子や、JAL スカラシップでの経験をどう活かしているかについて発表があった。



その後、ランダムグループでの交流会が行われ、プログラムの参加へのアドバイスや、日本を訪問する際の不安などグループごとに意見交換をしながら世代を越えた交流が行われた。

交流会後には、2004 スカラー生から「将来どうなるかわからないが、その時に一生懸命やっていたら将来につながる事が多くあったので、今回のプログラムでの日本での時間を一生懸命楽しんでほしい」とのメッセージが伝えられた。

4.すだちグループ

徳島でのフィールドトリップ

- ・ゴミ分別の工場視察
- ・紫蘇葉の工場見学
- ・鳴門の渦潮
- ・阿波踊り体験

ゴミ分別



徳島でのゴミ分別の勉強はとても印象的で、帰国した後、タイでできるだけゴミを分別した。

★日本航空(JAL)の環境の取り組み紹介

講師:千村夏毅 氏(日本航空株式会社総務本部 ESG 推進部環境推進グループ主任)

日本航空(JAL)グループによる環境への取り組みが紹介された。

まず「E」の方針について説明がされた。JAL グループでは、経営戦略において、ESG 戦略を最上位に据えており、ESG が会社としても非常に重要視されている。また、JAL グループの行動規範である「豊かな地球を次世代へ」の達成に向けた負荷軽減の取り組みや情報開示に関する環境方針について説明がされた。

その後、JAL グループで実施されている環境負荷軽減の取り組みについて、二酸化炭素の排出を削減した持続可能な航空燃料である SAF の使用や、二酸化炭素を固定化する技術への投資などが紹介された。その他にも、使い捨てプラスチックの削減や、気候変動対策と騒音対策を組み合わせた JAL Green Operations の取り組み、生物多様性保全への取り組みなどが実施されている。

質疑応答では、JAL が 2050 年までに二酸化炭素の排出を実質ゼロにするための取り組みに関する専門技術などへの疑問が多く上がった。「CFRP(機体の材料の一種)のリサイクルは難しいのでは?」という意見に対し、「現状ではリユースが主で完全なリサイクルは進んでいないが、CFRP の軽量化による燃費改善のインパクトは大きく、腐食に強いといったメリットもあるため、総合的に見て環境負荷低減に貢献している」との解説がされた。また、講義中には話されなかった点にも質問が上がり、「JAL の機内食におけるフードロスの対応策はあるか」との問いかけに対しては、「調理段階での食材の無駄を減らす工夫や、廃棄してしまう皮などは堆肥化している。しかし、機内で余った分は検疫の関係上焼却処分している」との説明がされた。さらに、事前に機内食不要を申告できる「JAL Meal Skip オプション」の取り組みも紹介された。

環境負荷低減の取り組み

気候変動への対応 ✓ 2050年までにCO ₂ 排出量実質ゼロ ✓ 目標達成に向けて「省燃費機材への更新」、「運航の工夫」、「SAFの活用」、「排出権の取引の活用」に取り組む	限られた資源の有効利用 ✓ 使い捨てプラスチックの削減 客室・クックシ、新緑石油由来 全廃 貨物・空港: 環境配慮素材へ100%変更 ✓ 廃棄物の削減、リサイクルの促進	環境汚染の予防 ✓ 産業廃棄物最終処分率1%以下維持 ✓ 航空機から排出される有害化学物質の管理・削減
騒音の低減 ✓ 低騒音機材での運航 ✓ 騒音低減方式での運航	生物多様性の保全 ✓ 認証取得済み素材の活用 ✓ 違法な野生生物の取引防止 ✓ 観光資源の保全、エコツーリズム	「気候変動への対応」、「限られた資源の有効利用」の取り組みの中から、 運航の工夫 省燃費機材への更新 紙コップリサイクル エコツーリズム の3つについてご紹介します。

省燃費機材への更新

JALグループが保有する省燃費機材

AIRBUS A350-1000 従来の燃費効率材料 (CFRP)は52%活用、軽量化	AIRBUS A350-900 JAL GREEN 3号機: エコクラウン 従来の燃費効率材料 (CFRP)は52%活用、軽量化
CO ₂ 従来機比較 15~25%減 SAF 搭載燃料の1%相当をSAFに置き換え	CO ₂ 従来機比較 15~25%減 羽田発 伊丹・新千歳・福岡・那覇線 伊丹発 那覇線
羽田発 ニューヨーク線、ダラス・フォートワース線 1 NEW 1 ロンドン線	

★オリエンテーション

25名の海外スカラース生と、7名の学生コーディネーター(日本人学生)が東京に集まり、翌日は福岡へ移動。オンラインで顔を合わせていた仲間たちと念願の初対面をした。

オリエンテーションでは、グループごとの海外スカラース生・学生コーディネーターの自己紹介、事務局メンバーの紹介、参加の注意事項、日本でのマナーについて説明があった。また、本プログラムのために多くの人が協力してくれていることを忘れず、時間を守って学びの姿勢を大事に参加するよう、改めて共有された。交流企画として「なんでもバスケット」も実施し、和気あいあいとした対面プログラムのスタートとなった。



★チームビルディング

『地球人』として学び合うグループになるために、これからの2週間、自分は何をするか？みんなに何をしてほしいか？』を考えるため、アクティビティを通じた交流を行った。実施した主なアクティビティは、次の通り。

- 全員で円になって、名前の五十音、今日起きた時間などで順番に並び変わる「ラインナップ」
- 人によって感じ方や緊張場面が異なることを知るゲーム「Cゾーンアンケート」
- カードを使ってなるべくたくさんの人と関わるゲーム
- 相手と息を合わせて、拍手でリズムを奏でるゲーム「ハイファイブ」
- フラフープを使った、小グループで協力するゲーム「ヘリウムフープ」など
- 航空と日本文化を楽しみながら学ぶ「ひこうきかるた」

参加者一人ひとり、またアクションプランを作成するホームグループ同士が打ち解け、協力する基盤を作ることができた。



★環境ワークショップ「砂浜」

オイルタンカーの油が流出してしまった海を題材に、環境問題について考えるワークショップを実施した。バケツに油が流出した海のモデルをつくり、潮の満ち引きと共に油がどのように広がっていくかを観察した。海外スカラー生たちはこのあとの研修で実際の現場に赴き、その目で見たものや感じたことを自分の国に持ち帰る。そういった意識のもと、海のモデルの観察はグループで協力して行い、見たものを他者に伝えていくことを体験した。後半では、油を回収するのに適した材料を確認するための実験を行った。

人間が汚してしまった環境は、まったくの元通りに戻すことはできない。そもそも環境を汚さないようにすること、そして今ある状態から改善していくには、一人ひとりの暮らしの中でできる工夫や、新たな技術開発などのアプローチがあることを学んだ。



★日本文化体験ワークショップ「水引をつくろう」

「水引」とは祝儀袋や贈答品に用いられる飾り紐で、和紙を細くねじって作るひも状の「こより」を編んで様々な形を作ることができる。日本文化の中で水引がもつ意味合いについてレクチャーを受けたあと、水引ストラップを制作した。グループで交流し、時には教えあいながら、仲を深める時間となった。



★水の循環を知る「源流ツアー」

宗像市を流れる「釣川」は、市の中心部を貫き玄界灘へ注ぐ全長約 16 キロの河川である。宗像市民にとって唯一の飲料水源であり、農業用水源としても利用されている、まさに「命の川」だ。「むなかた水と緑の会」の福島氏を講師に迎え、その源流をたどるツアーを実施した。山のふもとから広大な棚田の横を歩き、木々に囲まれた源流部へと山を登った。実際に源流に着いてみると、地面からじわじわと水が湧き出していた。先ほど田んぼを潤していたとは思えない、初めてみる源流の姿にスカー生たちは驚いていた。源流に向かう道中では、周囲の森林についても、かつて人々が植林や山の手入れを行ってきたこと、しかし人口減少などにより管理が行き届かなくなっている現状などを学び、川と山と人との関わりについて理解を深めることができた。

また、福島氏からは、環境教育では「すぐに効果を期待せず、細く長く続けることが何より大切だ」という言葉をいただいた。コツコツと取り組み、自らできることを考え行動することこそ意義がある。「むなかた水と緑の会」で長年実施している釣川のクリーン活動も、当初は 70～80 人で始まった活動が、現在では約 3,000 人の協力者に広がっている。長年にわたって地域の人々が紡いできた環境保全の歩みと成果を知る場となった。



★講義「SDGs 未来都市『宗像市』の取り組みについて」

宗像市経営企画課の原田氏を講師に迎え、宗像市の SDGs の取り組みについての講義を実施した。宗像固有の自然と文化である世界遺産『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群について、美しい自然や海を守る様々な取り組みの話を書いた。そのうちの 하나가、「湖池屋プライドポテト」との協働している、ポテトチップスの売り上げ 1 袋につき 1 円が宗像市の海の環境保全活動に寄付される活動「Save the Sea」である。実際にポテトチップスを試食しながら、おいしく自然を守る取り組みの事例を学んだ。他にも、野菜クズやだしをとったあとの昆布をウニの餌として活用することで、増加するウニから海藻を守る「宗像ウニプロジェクト」や、1960 年代に建てられた「ひのさと団地」の高齢化や住民減少、建物の老朽化の問題に取り組む「ひのさと 48」など、市が取り組む様々な活動を知る機会となった。後半には、近年、外国籍を持つ人口も増えている宗像市で、様々なバックグラウンドを持っている人々がどのように暮らしのルールを共有することができるかについてもディスカッションを行った。



★宗像大社の参拝体験と世界遺産『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」を学ぶ

宗像大社は『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」として世界遺産に登録されており、宗像市の本土、大島、沖ノ島の三女神伝説とともに、朝鮮半島と九州をつなぐ海の安全を願う祭祀の文化が守られてきた。海と密接に生きてきた地域の文化・生活や考え方には、海と人がともに生きるためのヒントが多く隠されている。沖ノ島から出土された国宝が保管されている神宝館の見学や、拝殿に上がって正式な参拝の体験を通して、それらを学んだ。



★基調講演「世界遺産の海『宗像 Munakata』で地球の持続可能性を考える」

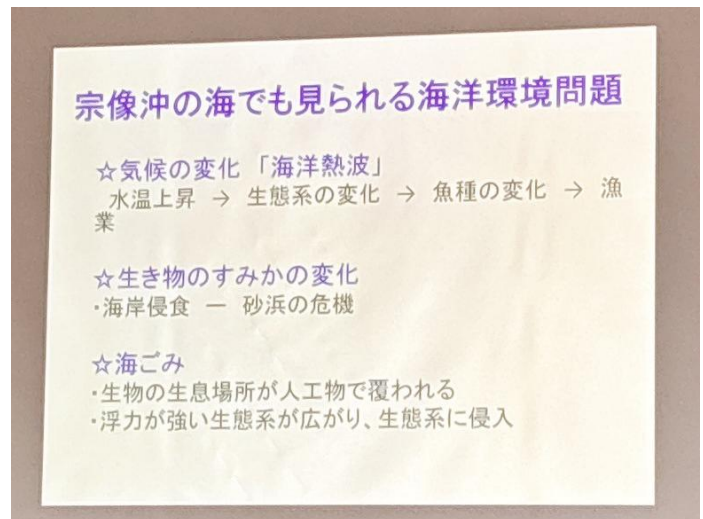
講師：清野聡子 氏(九州大学大学院 工学研究室 環境社会部門 生態工学研究室准教授)

講演は、海を守るためにユース世代が世界をリードしているという実例の紹介に始まった。海のプラスチック汚染を世界的に終わらせるためには、ユース世代が国際会議等でこれからの社会に向けた意見を出すことや、消費者として環境に配慮した商品を選択したりすることで、社会や企業を動かすことが重要となる。

また、宗像市は古来より“海洋民族”として海とともに暮らしてきた。宗像大社沖津宮のある「沖ノ島」は歴史的に交易において重要な地であり、それには周辺の地域間にある潮の流れがもたらす海の恵みが関係していた。

しかし、近年の地球温暖化の影響により、海水温が上昇しそれが数日間持続した現象「海洋熱波」が起こり、日本近郊の海洋に様々な問題もたらしている。海水温の上昇は地球全体の海の温度差をなくし、それにより海流が滞留し「海が死んでしまう」状態をもたらしている。さらに、海が温まることで、稚魚が育ちにくい環境となり、漁業者の仕事がなくなることが社会不安につながっていく。また、雨の振り方にも変化が起き、洪水により食物が取れにくくなることも社会不安、ひいては人々の争いにさえもつながっていく。このように、環境の変化が人間の心理にも変化を及ぼし、わたしたちの暮らしにも大きな影響が出るのである。

こういった点からも、海は国境がなく世界がつながっており、これらの問題は国境を越えた共通課題であると伝えられた。環境問題の解決には一つひとつの国だけでなく、アジア・オセアニア地域同士や世界各国が協力して考えなければならないのだと学んだ。



★福岡教育大学の紹介・キャンパスツアー

福岡教育大学を訪問し、現地の学生との交流を行った。大学および福岡県の紹介、SDGs クラブの活動紹介が行われ、海外スカラース生・学生コーディネーターと福岡教育大学の学生が混合でグループに分かれて活動した。福岡教育大学の敷地を見学し、図書館に貯蔵されている古い日本の教科書を見せてもらうキャンパスツアーも実施した。



★福岡教育大学生とのワークショップ「お互いの国の環境問題の現状・SDGs 取り組みをシェアして考えよう！」

はじめに、事前課題である「自分の住んでいるまちのSDGsの課題」について、グループごとのディスカッションが行われた。自分たちに身近な問題について調べてきた情報を共有し、模造紙にメモを取りながら、世界の様々な課題を理解した。

その後、グループごとに「SDGs の課題の解決を『促進するもの』と『阻害するもの』」がなにか、キーワードを書き出すブレインストーミングを行った。5分という短い時間制限のなか、全員が集中力を発揮して取り組む姿がみられた。そして、どんな言葉があったかを全体で共有し、今後の自分の活動に持ち帰りたいキーワードを3つだけ書き出す「アイデアシート」をつくった。最後には、一人ひとりのアイデアシートを紹介して交流し合った。選ばれたキーワードには、「お金」「時間」「心の余裕」「人との関係」といった言葉が多くの人に共通しており、制度的な問題と人々の意識が表裏一体となって SDGs の課題につながっていることがわかった。海外スカラース生・学生コーディネーターからは、「一番心に刺さったことはみんな地域によって考え方や環境問題が全然違い、その解決法もそれぞれだったこと。当たり前のようなことではあるが、ずっと忘れていた大事なポイントなのでみんなとこうして話せる機会の大切さに気づけた。」「文化や国が違っていてもSDGsの推進要因と阻害要因のキーワードは共通しており、生きる上で大切にしているものには共通点が多くある事に気づかされた。」といった感想が寄せられた。



★さつき松原海岸～大島でのビーチクリーン及び中津宮と遙拝所の参拝

認定 NPO 法人改革プロジェクトの協力を得て、さつき松原海岸でビーチクリーンを行った。グループに分かれて、砂をザルですくい、細くなったプラスチックの破片を回収した。猛暑の中での 10 分程度の活動だったが、短い時間でも多くのごみを回収することができた。海流にのまれてもろくなったプラスチックは細かく砕かれてしまい、砂の中にどんどん混ざっていく。細くなる前に回収することがいかに重要となるか、身をもって体感した。

その後、フェリーで大島へ移動し、宗像大社の三女神の次女が祀られる中津宮を参拝した。昼食は民宿「つわせ」にて、その日の朝に大島で採れた魚をいただいた。

昼食後には、午後の大島学園でのワークショップで使用する海ごみの回収のため、「つわせ」前の海岸で再びビーチクリーンを実施した。さつき松原海岸とは異なり、発泡スチロールの塊や、漁具など比較的大きなごみが大量に流れついていた。日本語以外の言語が書かれたごみもみつき、潮の流れによって海岸に流れ着くごみの量や種類が異なることを学んだ。

ビーチクリーンの後は沖ノ島を眺める遙拝所を訪問した。遙拝所から眺める海は透き通った青色。しかしすぐ横の海岸に目を向けると、そこにも漁業で使うネットや、浮きなどのごみが大量に流れ着いていた。そこで、もともと予定にはなかったが有志でビーチクリーンを実施し、次の活動場所である「大島学園」へと移動した。



★大島学園の小学生・中学生とのワークショップ「ウミゴミーをつくろう」

大島学園を訪問し、6年生と中学生の計14名と一緒にグループに分かれて活動した。海外スカラー生・学生コーディネーターが海岸で拾ったごみを題材に、ごみが捨てられてから海ごみになるまでのストーリーを想像し、人間に捨てられたごみから生まれた妖怪「ウミゴミー」というキャラクターをつかった。グループごとに全く異なる視点から海ごみを観察し、ごみが捨てられるに至った背景を想像した。はじめはお互いに緊張した面持ちだったが、アイスブレイクのアクティビティやキャラクター作りの間にだんだんと緊張もほぐれ、協働しながらごみのストーリーに想像を膨らませた。最後には、これ以上海ごみを増やさないためにできることを考え、ウミゴミーが伝えたいメッセージとしてグループごとに発表した。

大島学園の学生と別れた後は、大島の特産品のゼリーを食べて、改革プロジェクトが実施する取り組み紹介を聞いた。街を走ってパトロールをする、スポーツを交えた社会参画のしくみ「パトラン」の参加者募集がされ、半数近くのスカラー生が参加を申し出た。日本の宗像ではじまった取り組みが世界に広がっていった。



★公害を乗り越えた町の歴史と現在の取り組みを学ぶ

福岡県北九州市の「タカミヤ環境ミュージアム(旧:北九州市環境ミュージアム)」を視察した。北九州市はかつて深刻な公害被害に見舞われていた。しかし、市民が立ち上がり、他の自治体に先立って公害対策の実施や、企業も技術革新に積極的な取り組みを行ったことにより、公害問題を克服した地域である。公害克服の経験で培われた地域社会のパートナーシップは現在のまちづくりや地域環境改善活動に引き継がれ、現在は「環境モデル都市」として市民、企業、研究機関と行政が一体となっている。タカミヤ環境ミュージアムでは、公害克服の歴史と地域社会のパートナーシップ、現在の北九州市で行われているリサイクルや環境の取組についての展示を見学し、これからの在り方を一人一人が考えるきっかけとなった。



次に、株式会社サニックスひびき工場を訪問した。ひびき工場は、全国から運ばれる外食チェーン等の飲食店の廃液や、食品工場等の大量廃液、その他工場から排出される工業廃水など、多種多様な廃液を処理する国内最大規模の廃液処理施設である。廃液処理の他にも、廃液中の油分を利用した再生油 Bio の生産に取り組んでいる。この日は多くの社員の方々に温かく出迎えられながら、廃液処理のしくみを学ぶとともに、工場内の施設の視察をした。さらにプラスチックごみのアップサイクルや、SDGs カルタなども体験し、楽しみながら地球環境について思いを馳せる時間となった。海外スカラー生・学生コーディネーターからは、行政ではなく企業が廃液処理を大規模に実施していることに驚きの声があがり、処理のしくみや企業同士の連携について多くの質問がされた。



その後、魚町商店街を訪れた。魚町商店街は 2018 年に SDGs 商店街宣言をし、ホームレス自立支援・障害者自立生活支援などにより第 3 回 SDGs アワードで内閣総理大臣賞を受賞した商店街である。海外スカラー生は実際に商店街を自由に見て回る中で、各商店が取り組む SDGs の要素を体感した。

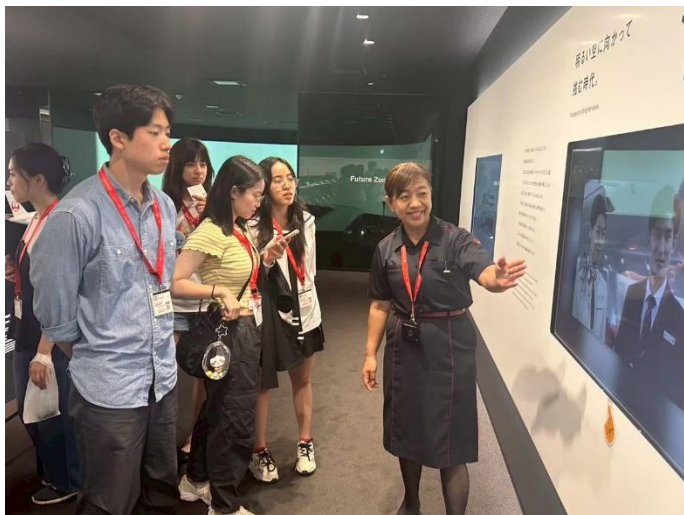


★JAL スカイミュージアムの視察

福岡から東京へ移動し、JAL スカイミュージアムを訪問した。

JAL スカイミュージアムでは、JAL の仕事内容の紹介や空港の役割について解説があり、また、飛行機のcockpitや客室の雰囲気を楽しめる模型、未来に向けたプロジェクトなどの展示を見学し、航空の歴史や各職種の仕事、安全運航について学んだ。オンラインプログラムの講義内で紹介された、機内で使用した紙コップをアップサイクルしたタオルなどのグッズの販売もあり、講義で学んだものの実物にふれることもできた。

格納庫見学では整備中の飛行機を間近で見て、その迫りに圧倒された。この日は、JAL での役目を終えた機体を整備する様子も見学することができ、他の場所で新たに使われていく飛行機のリサイクルについても知る機会となった。



★株式会社 JR 東日本テクノハート TESSEI 社とジブリ美術館の視察

グループごとに終日活動して、株式会社 JR 東日本テクノハート TESSEI 社とジブリ美術館の視察を行った。

株式会社 JR 東日本テクノハート TESSEI 社は、新幹線車両清掃の専門会社である。特に東京駅での清掃は、駅での停車時間の 12 分のうち、お客様の乗降時間を除く実質7分間ですべてを完了させることから、メディアなどで「7ミニッツミラクル」として取り上げられ話題となっている。常に快適な環境で電車に乗って移動できる社会インフラがどのように整えられているか、清掃業の枠を超えた「おもてなし」の姿勢を社員間で共有していくチームビルディングがどのように行われているかを学んだ。



ジブリ美術館では、日本を代表する文化の一つ「アニメ」を通して、自然と共存して生きてきた日本の暮らしを学んだ。日本の自然を美しく描くジブリ作品からは、自然の荘厳さや厳しさ、公害の問題、里山文化、そこに暮らす人々の暮らしや葛藤などをさまざまなストーリーから読み取ることができる。海外スカラー生・学生コーディネーターたちは自由に美術館を見て回りながら、映画で描かれた背景や解説の展示などを見学した。



★日本フードエコロジーセンターの視察

株式会社日本フードエコロジーセンターは、余った食品をリキッド発酵飼料化し、その飼料を食べて育った豚をブランド化することで価値を生み、また消費者へ届ける地域社会の循環を構築しているフード・リサイクル分野のパイオニア企業である。近年は新たに、さがみはらバイオガスパワー株式会社を立ち上げ、飼料化できない食品を用い、メタン発酵によってバイオガスを発生させるガス発電を行う売電事業にも取り組んでおり、国内初のカスケード利用型食品リサイクル施設を運営している。

はじめに代表の高橋巧一氏より、食品ロスが引き起こす問題や、食品調達による環境破壊に関するレクチャーを受けた。次に、実際に工場内を見学し、食品循環資源が発酵飼料化されていく過程や、メタン発酵が行われている発酵タンクを見て回った。見学後の質疑応答では、「もし社会から食品ロスがなくなったら事業が成立しないのでは？」といった事業のビジネスモデルやリスクヘッジに関する具体的な質問が多く上がった。それに対し、高橋氏からは「もし食品ロスがなくなるならそれでよい。本センターは、社会課題の解決を目指しているため、課題が解決したのであれば別の課題を探すのみ。」といった回答がされた。こういったやりとりからも、本センターの取り組みの先進性に感心する様子が多く見られた。また、「非の打ち所がないシステムが既に構築されていて、それが波及していけば良いと

思ったが、そのためには法律などの制度設計が大きな壁となるように思えた。」というように、深掘りした質問を重ねるなかで、先進的にみえる取り組みにも課題があることを学んだ。

また、この日の昼食では、リキッド発酵飼料を食べて育った豚肉のブランド「優とん」を使ったお弁当を食べ、話を聴くだけにとどまらず五感を使って学びを得る体験となった。



★さがみこファームの視察

株式会社さがみこファームは神奈川県相模原市の遊休農地を活用し、農産物と自然エネルギーを同時に生産する「ソーラーシェアリング」と体験農園を通じた地域活性化事業を実施している農園である。園内では36種類、1,100本のブルーベリーの食べ比べが可能であり、個人・団体向けに様々な体験プログラムを提供しており、令和6年には第1回かながわ脱炭素大賞を受賞している。

はじめに農園の概要やソーラーシェアリングについて説明を受けた後、農園を見学しながら回るガイドツアーを実施した。ソーラーパネルの違いや、野生動物からブルーベリーを守る仕組み、農園の規模拡大と今後の展開について話を聴いた。見学中にはブルーベリーの食べ比べを体験し、種類によって異なる味わいを堪能した。太陽光をそれほど必要としない農作物とソーラーパネルを組み合わせることで売電収入が入るため農園経営の持続性が高まるというビジネスの視点、またソーラーパネルで発電することで化石燃料の発電を減らすことができるという環境保全の視点に海外スカラー生・学生コーディネーターたちは感心しており、「一石二鳥のシステムだなというふうに感心し、自分の事業の利点と環境課題を組み合わせる仕組みの見本として参考になった。」「ファームの人という立場と経営者としての立場両方から回答頂けたことが非常に面白かった。」といった声があった。また、農園で発電した電力が非常時に地域の人々に供給されるといった地域連携についても、「一番印象的なことは地方市民との連携。シーズンの忙しい時期は地域住民の方がパートタイムとしてお手伝いに来るということや災害時の緊急の電気を無料で提供するなど地域と密接に関わることは良いなと感じた。」といった感想が上がった。



★埋立処理場・廃棄物処理施設の視察と森林整備活動

NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会の案内で、午前中央防波堤埋立処分場・廃棄物処理施設を、午後海の森公園を訪問した。午前の見学では、はじめに施設内の大型スクリーンにて映像を視聴し、東京都 23 区内で出されたごみがどのように処分されているのか、また、中央防波堤埋立処分場の成り立ちや課題などを学んだ。その後、バスに乗って廃棄物処理施設と埋立処分場を回り、ごみ処理の流れを見学した。

午後は埋立が終了した処分場を約 20 年の歳月をかけて森へと再生させた「海の森公園」を訪問した。はじめに樹木・環境ネットワーク協会が発案したボードゲーム「ぼくらの里山いきものゲーム」を体験し、里山を再生させていく道のをボードゲームを通して体験した。その後、ボランティアの方々の案内のもと海の森公園内を散策し、公園の森林整備の一環として雑草除去の作業を行った。日差しが強い野外での活動となったが、スカラー生たちはお互いに励ましの声をかけあい、休憩をはさみつつ約1時間の雑草除去作業に熱心に取り組んだ。作業のなかで、ヘビやトカゲ、カエルなどの生きものにも出会うことができ、処分場を再生した土地の自然の豊かさにみな驚いていた。

最後に感想を共有しあう時間では、「埋立をする以上、現時点で抱える課題だけではなく何十年後の将来で予想される課題までもを建設的に考慮する必要性を感じた。」「これ以上はごみが発生しないようにみんなで頑張らないといけないと思うようになった。」と、現存の処分場の残余年数は 50 年しかないことへの危機感の声があった。一方で、「埋立地に森ができ、建物を建てることのできるのならば、埋め立て活用も十分重要な SDGs 解決策なのではないかと思った。」「市民の協力と、よい対策があれば、自然のごみから埋め立てたよい場所を作れると感動した。」といった意見も複数人から上げられ、ごみの山が森に再生したことに感動したといった感想もあり、ごみ処理に関する将来への懸念や、それでもこのような取り組みが実施されているのだという希望を抱いた時間となった。



★研修のふりかえり

オンラインプログラムと対面プログラム(福岡・東京)の行程が終了し、アクションプラン作成に向かうふりかえりの期間に入った。オンラインプログラムの最後で行った「一筆入魂」と、プログラムの全行程が示され、長かったようであっという間に過ぎた約3週間の行程の一つひとつを思い返した。その後、個人ワークで印象に残ったSDGsに関連するキーワードや思い出を4つの言葉にまとめ、ホームグループでプログラムの感想や気づいたこと、学んだことをシェアした。さらにグループを移動して別グループのメンバーとも感想や意見を共有して意見交換を行った。

その後、グループでアクションプラン作成に向けたブレインストーミングを行った。グループごとに100枚のふせんが配られ、各自が出した4つのキーワードから派生して思い浮かぶ言葉を時間内になるべく多く書き出すチャレンジをした。



★アクションプランの作成

対面プログラムでの経験をふまえて、ふりかえりで出したキーワードをもとにホームグループでアクションプランの作成に取り組んだ。1日目の話し合いを終えた夜には、会議室の使用時間を過ぎても共有スペースや個人の部屋などで自主的に集まり、遅い時間までプランの作成を続けるグループもあり、それぞれのグループの個性が光る、メンバーの得意を活かしたプランが練られた。



★ワークショップ「わたしの2030年目標」

グループでの行動目標であるアクションプランの作成に続き、海外スカラー生がそれぞれ自分の地域へ帰ったあとに、各自でできることや将来の夢について、SDGsの目標である2030年までの5カ年目標を立てた。「5年後(2030年)に、どんな自分になっていきたいか?」という問いが出され、各自がそれをゴールとして、必要なスキルや経験、人脈などの要素を書き出し、半年後、1年後、3年後、5年後にそれぞれ何を達成するか目標を立てた。数人のグループで共有した後、全員の計画を横に並べながら、自分が目標に向けて取り組んでいるとき、隣の海外スカラー生・学生コーディネーターが同じように目標に向けて何をしているか想像した。具体的なイメージを言語化するのに苦戦し時間がかかった人や、みんなに自分が抱く目標を発表することに緊張した人もいたが、最後には全員がそれぞれの「わたしの2030年目標」を作成することができた。

最後に、「わたしの2030年目標」を漢字1字で表現し、翌日の発表会で紹介する準備を整えた。



★アクションプラン発表

JAL スカラシッププログラムの集大成として、全行程を終えた海外スカラー生・学生コーディネーターによる発表会が行われた。発表会にはプログラムに協力いただいた講師の方や 2024 スカラー生にも一部参加いただき、随所でコメントをいただいた。

ホームグループでの話し合いでは、本プログラムが終了してから半年間で起こせるアクションプランを考えた。アクションプランの発表会は、1 グループ 25 分(準備等含む)で進行し、午前 3 グループ、午後 3 グループが発表。それぞれ、夜遅くまでプランの練り直しや演出、発表練習に費やして挑んだ発表会となった。

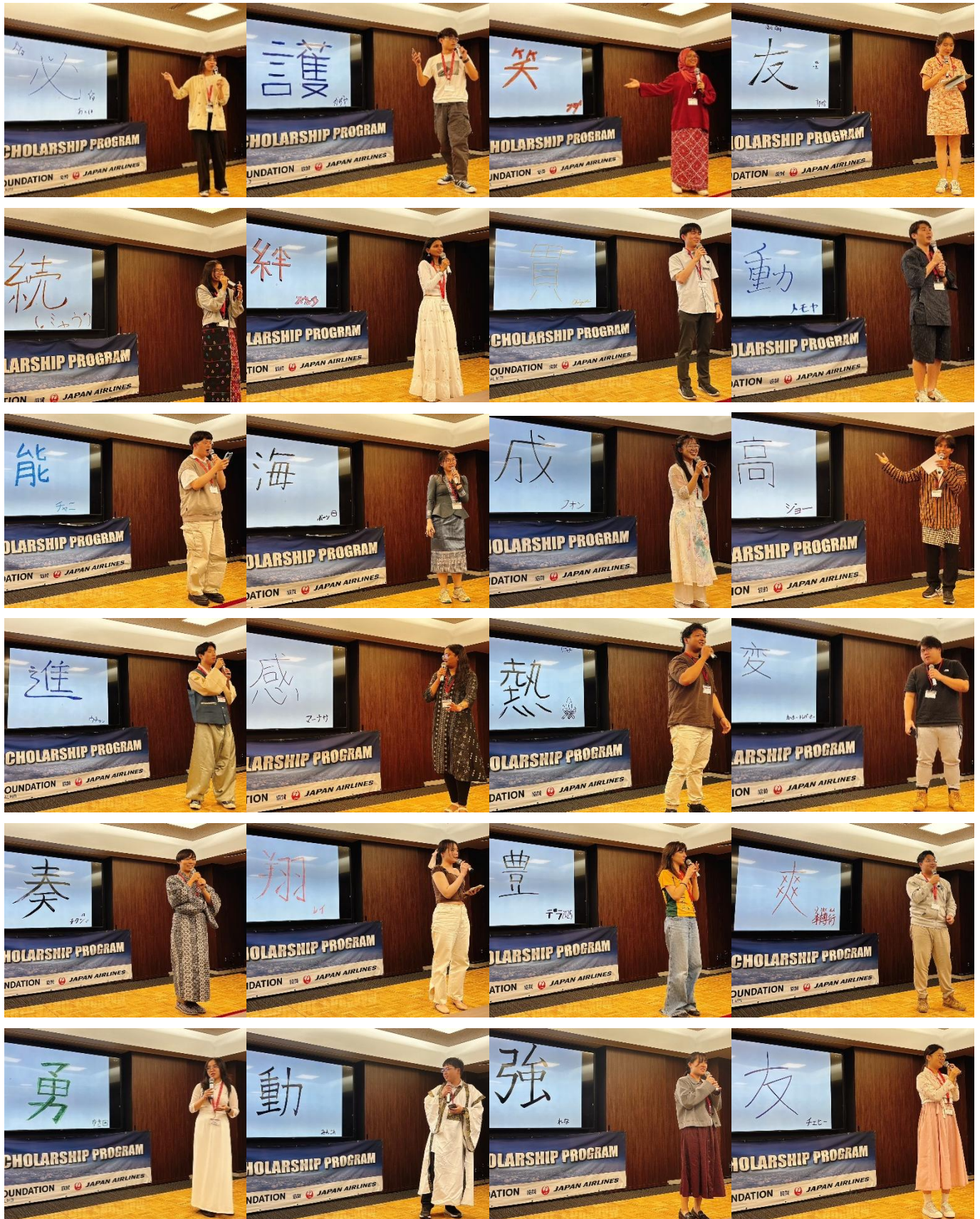
発表順及びホームグループ(チーム名)とアクションプランの概要は下記の通り。

- グループ5:おさがりプロジェクト(大学内でおさがりサービスを運営)
- グループ3:知ろう!ごみ問題(SNS での動画配信)
- グループ7:雨水プロジェクト(水資源の大切さを伝えるキャンペーン)
- グループ1:ONE DAY ECO(小さな取り組みを実践して続けていく)
- グループ4:ごみの旅路を辿る(うみゴミ削減をテーマにしたゲーム開発)
- グループ2:JKATV(日本語学習者向けの SDGs ラジオコンテンツ)



★「わたしの 2030 年目標」の発表

ホームグループによるアクションプランの発表に続き、一人ひとりが立てた 2030 年までの目標を示した漢字 1 字を発表した。2030 年目標や将来の自分の夢、プログラムを通して抱いた志などを、様々な国と地域から集まった次世代を担う若者たち一人ひとりが真剣な眼差しで語った。本プログラムでの経験が、夢の実現に向けた貴重な一歩となり、プログラム終了後もそれぞれが歩み続けていくことを願ってやまない。





★修了式

発表会後には修了式が行われた。海外スカラー生・学生コーディネーターたちは JAL 財団理事長 赤坂祐二より一人ひとり修了証書を手渡され、その後全員での記念撮影を行った。



★フェアウェルパーティー

フェアウェルパーティーでは食事を共にしながら、最後の時間を過ごした。学生コーディネーターが企画したサプライズムービーの上映や、うちわ型のカードにメッセージを書き合うメッセージ交換などを行った。また、海外スカラースタッフから学生コーディネーターへもサプライズプレゼントがあり、ほかにもプログラム期間中に誕生日を迎えた学生をお祝いするなど、最後まで楽しい時間を過ごした。最後はみんなで円になって、プログラムの思い出や一緒に時間を過ごした仲間たちへの想いを語り合い、それぞれが別れを惜しみ、将来の再開を誓い合った。

海外スカラースタッフ 25 名、学生コーディネーター 7 名がそれぞれの国や地域に帰り、今回のプログラムで学んだ経験を活かしてどんなアクションを起こし、さらなる成長を見せてくれるのか。プログラムは終了するが、今後の活躍が非常に楽しみだ。



おわりに

2025 JAL スカラシッププログラム実施においては、各地で関係の皆さまの多大なご支援を賜りました。「SDGs」に関する学び、日本の文化等について、最高の舞台をご準備いただき、海外スカラース生・学生コーディネーターたちを暖かく迎え入れ、細やかに対応いただきましたこと、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

主 催： 公益財団法人 JAL 財団

協 力： 公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援： 外務省、国土交通省、文部科学省

協 賛： 日本航空株式会社



2025 JAL スカラシッププログラムの
海外スカラー生・学生コーディネーターの皆さん、
本当にお疲れ様でした。

また会いましょう！